

サビタの記憶

原田 康子

新潮社版

サビタの記憶

昭和三十二年五月十一日印刷
昭和三十二年五月十五日發行

定價二六〇圓
地方
賣價二七〇圓

著者 原田 康子
發行者 佐藤 亮一
印刷者 山元 正宜
發行所 株式會社新潮社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京(34)七一〇八
振替東京八〇八番
亂丁、落丁のものは本社又は買求
めの書店にてお取替えいたします。

印刷 三晃印刷株式會社・製本 神田加藤製本所

© Y. HARADA 1957 TOKYO Printed in Japan

目次

夜の喜劇	五
サビタの記憶	三
週末の二人	五
雪の巣	九
愛しの鸚鵡	一三
晩鐘	一六
薔薇の匂い	一七
夜の出帆	二五

裝
幀
福
田
豊
四
郎

サ
ビ
タ
の
記
憶

夜
の
喜
劇

夜でした。もうかれこれ十時ちかくでしょう。山の手の住宅街は、ひどくひっそりと、静まりかえっております。徐々に、街は眠りかけているのです。ほとんどの家は、厚くカーテンを閉ざしていました。もうすっかり、明りを消した家さえあります。そのなかでただ一軒、カーテンもかけず、窓からいっぱいに、明りのもれている家がありました。ですから、その家の窓のあたりは、ひくい植込の躑躅も、テッセンの這った石塀も、葡萄酒色にそまっております。

煉瓦造りの、平屋でした。あまり大きな建物ではありません。でも、どことなく気どった感じの、そう、ショウト・ケエキのような家でありました。なぜこの家だけ、葡萄酒色の明りがともっているのでしょうか。カーテンもかけずに。ひどく愉しいことでもあるのでしょうか。そうでもなさそうです。と、いうのは、明るい窓に、一人の女の影がうつっているからです。窓に背をむいた黒い女の影は、ゆるいガウンをまとっているようでした。右手の指に細長いシガレット・ホルダアをはさんで、たばこの煙がゆれています。ただ煙が立ちのぼるだけで、女は唇へたばこを持って行きません。灰が、ときどきくずれ落ちます。だるそうな肩の線。これでは、たのしいことがあるようにもみえません。

女はときどきむきをかえて窓のそとをみました。ひかった黒い長い髪、ぬれたような眉と眸。赤いくちびる。すらりとした、いかにもあでやかな女であります。女は、葡萄酒色のおもてをみては、そのたびに、口元にふしぎな笑いを浮べました。そして、

「まだいるわ」

と、いうのです。なにが、いるのでしょうか。

ちょうど、この家の石塀の影に、ひとりの男が立っていました。塀がひくいので、男の姿は、窓の傍の女からよくみえるのでした。

男はまだ若く、学生のようにありました。黒い学生服を着て、制帽をかぶっています。ズボンのポケットに両手をつつこんで、暗い空をみたり、うつむいたり、腕時計をみたり、所在なさそうな格好です。じつは、青年はもう一時間もまえから、ここにこうしているのです。逢いびきの約束があったからでした。ところが、恋人の少女は、約束の九時をすぎてもこないのです。

青年はいらいらしてきました。なんてやつだ、と口のなかで恋人を恨みました。しかし心底から怒ったわけでもありませんでした。恋人の少女は、すこしおきやんで、神経質で、不良みたいなところもあったのですが、青年にはたいへん優しく、素直だったからです。うそをいったことは一度もありません。逢いびきのとき、待ち呆うけになるのは、たいてい少女のほうでありました。たまに、五分くらい約束の時間に遅れると、涙ぐんであやまりました。そういうとき、青年はひどくうれしくなって、少女のやわらかな髪を、やさしく愛撫するのがくせになっていました。

です。から今夜も、五分もすると、恋人が泣きだしそんな顔をしてくるものとばかり思っていました。

その二人は、今日の正午、この同じ場所で逢ったのでした。春の陽が、うらうら燃えて、躑躅の甘い匂いがしておりました。青年は学校の昼休み、少女は勤め先きの高級喫茶店を脱けだして、夜の逢いびきを打ち合えたのでした。少女はその夜、勤務ではありませんでしたから、ゆっくり青年と遊べるものと、喜んでいました。

「六時ね、ここで」

と、少女はいいました。

「そのあと、わたしのアパートへ行かない？　今夜はママがいないの。わたし、あんたに、おいしい夕食をつくってあげるわ」

ところが、青年は、ちょっと考えごとをしていたものですから、六時というのを九時と聞きちがえてしまいました。午前中、フランス語の教授にひどく叱られたことを、ふいに思い出したからです。なぜそんなことを思いだしたのでしょうか。でも、青年は、少女の言葉にたいそう喜びました。恋人が、アパートでおいしい夕食をつくってくれる、素敵だな、九時はすこしおそいけど、まあいいさ、と彼はにこにこしました。

さて、結果は素敵どころではないようです。なにしろ、二人とも時間を間違えたのですから。

ゆうぐれ、ほんとにその日のゆうぐれは、おだやかな、ほの暖かいゆうぐれだったのです。春の陽が落ちて、街に灯が、はしゃいだようにつきはじめたころ、少女は、高級喫茶店をでました、つとめているところが、高級だからといって、少女はちっとも高級な暮しなどしてはいないのです。卵色のセエタアに、青いスカートを、そして木綿の袴下をはいております。パアマネントをかけていない、赤っぽい髪はお下げに編んでおりました。お下げは、顎の細い、目の大きな少女に似合うのですが、じつはパアマをかけるお金がすこし惜しかったのです。ですから、帰宅の途中、夕食の買物をするのにも、少女はあれこれ考えました。しかし、恋人にごちそうするのです。それにこんなたのしい機会はめったにないものですから、肉や、野菜や、マヨネーズソース、それに果物を少女は買いました。

アバアトに帰って、掃除をし、まだ六時には間がありましたので、料理もとのえました。それから、前の晩おそくまでかかって、青年のイニシアルを刺繍したハンカチを、ハンドバッグに入れ、約束の場所にでかけました。ハンカチをプレゼントする気になったのは、まえの逢いびきのとき、青年のハンカチに、たばこのこげあとがついているのをみつけたからです。

その、ショウト・ケエキみたいな家の前についたのはちょうど六時でした。少女は腕時計など持っておりません。でも、煉瓦の家のなかから、鳩時計がものうさそうに六時を打つ音がきこえたのです。少女はふと昔を思い出しました。彼女がまだ小さいくて、父親が生きていたころ、栗

色の鳩時計が壁にかかっていたものです。家も、アパートではなく、木造の大きな屋敷でした。高い、黒い板塀が、いかめしく家のまわりを囲んでいました。庭には花が。そうです、躑躅もあつたようです。むかしを思いだして、少女はちよつと感傷的になりました。と、いうのも、青年がなかなか来なかつたからです。

少女は待つのにには馴れていました。しかし、馴れていても、やはり待つのは、せつないものです。それに、青年はいくら待たしても、十分もたてば必ず来たものでした。上気して、駈け寄つて、明るく笑いながら「ごめんよ」と、少女の手をとるのです。どうしたのかしらと、少女は思いました。なにか急用か、それともあわてて自動車にでも轢かれたのかしら、と少女は青白めました。それでも彼女は待ちました。青年はきつとくると信じたからです。わたしを裏切るようなことなにかしないわ、と少女は思いました。ほんとに青年はまじめでした。そのころ彼は、下宿で九時の逢いびきをたのしみにしながら、フランス語の動詞の変化を、いっしょうけんめい勉強していたのですから。

陽はすっかり落ちました。春の夜風が、なまあたたかく流れ、葡萄酒色の明りが、濃くなりました。少女は、ずいぶん長く待ちました。おそろく、一時間ちかくすぎたのではないでしょううか。すっかり、しょんぼりして、大きな、少女の眼はうるんできました。あの人は来ないのだ、と彼女は思いました。高価な夕食の買物、あれもむだになった。高くたつて彼さえきてくれたら。そうです。来なかつたら一文の価値もありません。それよりナイロンの胔下でも買ったほうが、ま

しなのです。電話をかけてみようかしらと、いくども少女は思いました。煉瓦の家には電話がありません。干×××番という、金属製の札が門柱にかかっております。でも、電話をかけているその隙に、青年がくるような気がして、彼女は今まで石塀のそばから動けなかったのです。しかし、もう躊躇する必要はなさそうです。勇気をだして、電話を借り、下宿の隣の酒屋さんに呼びだしてもらおう、いなかったらあきらめるのだ、と少女は決心しました。そのとき、葡萄酒色の明りが、いっそう明るくなりました。窓があいたのです。黒い部屋着をきた、女の白い顔が明りのなかに浮きました。女は少女をみました。笑ったようです。でもそれは、親しみなどこもらぬ、ふしぎな、ひややかな笑いのようでした。少女はたじろぎました。もうすっかり電話を借りる勇氣はくじけてしまいました。

あの女のひとは、ずっとわたしをみていたのだ——と、少女は思いました。そして、待ち呆うけを食ったわたしがおかしくて、ばかにして笑ったんだ。あの奥さんは、ご主人や子供たちと、もう夕餉をすまして、退屈なもんだから、おもしろがってみてんだ——と、少女は唇をかみしめました。

少女の想像は、だいぶはずれたようです。女は、ひとりきりで食事を済ませたのですし、ずっと少女をみていたわけでもありませんでした。笑ったのも、ばかにしたのではなく、しおれた小娘の格好が、なんとなくくすぐったく、それに、へんな笑いかたは、女の長い間の習慣になっていたのです。

そんなことを、少女は知るはずがありません。はずかしさと、かなしさで、少女は石塀のそばを離れました。そして、のろのろ歩いて、隣家の塀ぎわにきたとき、とうとう彼女は泣きだしてしまいました。いちど涙がでると、もう止まりません。少女はハンドバッグを抱きしめ、頭と、細い肩を塀に押しつけ、子供のよう泣きつづけました。ちょうどそのとき、黒くひかった高級車が、静かなその道路にさしかかりました。羽毛のつまったクッションに体をもたせて、車にのっていたのは、一人の紳士でありました。車は徐行していました。目的地が近かったからです。が、急に停りました。乗っていた紳士が少女をみつけたのです。それほど少女の姿は、哀れで、折れた花のようでありました。しかし、いつもなら、この紳士は、泣いている小娘を黙殺したことでしょう。その夜、紳士の調子は、いくぶん狂っておりました。気持がくしゃくしゃしていたのです。ですから、ほんとに、ちょっとしたものの弾みで、車から降りてしまったわけです。

少女は、肩に手をかけられて飛びあがりました。さいしよは、待っていた恋人がきたのかと思いました。が、青年の、固い強い手の感じではありませんでした。青年よりもっとやさしく、そのくせ、しつとりと重いような手の感じだったのです。彼女は、泣き止んで、おそるおそる相手を見ました。灰色のソフトをかぶり、紺のダブルの背広をきた立派な紳士でした。ひげを剃ったばかりのようで、顎のあたりが青味をおびていました。ちらと、少女は、どこかで、この紳士を見たことがあるような気がいたしました。しかし、そんなことより、泣いているところをみつかった、その気まり悪さで、少女はすっかり混乱し、赤くなりました。

「どうしたのです。体の具合でもいけないのですか」

と、紳士はていねいにたずねました。少女は、だまって紳士をみつめました。大きな眼はぬれて、顔は涙のあとで汚れていましたが。そうです、汚れてはいたのですが、そのとき少女の顔は、かなしさ、戸まどい、あきらめ、いろんな感情がごっちゃに走って、ひどくうつしく、コケティッシュでもあったのです。

三時間後、葡萄酒色の明りのもれる窓から、十時を打つ鳩時計の、ものうげな音がながれてきました。青年は、やはり石塀の影に立っています。女も窓のそばに立っています。

「ああ」

と、青年は長い溜息をつきました。すっかり待ちくたびれてしまったのです。複雑な、なんともいえぬ感情の線が、青年の頬で交錯しています。怒り、不審、悲しさ。それに、わるいことに、彼はひどく空腹でもありました。お腹がすくと、誰しもみじめな気持になるものです。青年は、その夜夕食にでた下宿のライスカレエの匂いを思い出しました。下宿でライスカレエをつくるなんて、めずらしいことです。

ところが青年は、恋人の少女がご馳走してあげると言ったものですから、がまんして食べずに自分のぶんを同じ部屋に住んでいる友だちにやってしまったのです。友だちは、大よろこびで青年のぶんも平らげました。いまに、もっと旨いものを食えるんだ。なに、安いもんだって彼女が